Japanese Association for Religious Studies

う。もう一つには、修行として捉える考え方もある。多くの苦に向き合い、自分自身と向き合うことを、僧侶としての修行と捉えるのである。また、重い相談を受け続けるには、ある種の諦念が必要であり、「僧侶としてやるべき」という理念だけでも維持できるものではない。「淡々と」「地味に」「特別な活動だと思わずに」活動するのが継続の秘訣と思われる。

社会状況が激しく変化する現代において、これからは、硬直化した教団組織よりも、個々の僧侶が、実践を通じて得たそれぞれの「仏教」なり「自覚」が説得力を持っていくのではないだろうか。そして、形式的には「僧侶ならでは」に見えない活動も、内実は、おのずと「僧侶ならでは」の活動になっていくと思われる。

代替療法「ホメオパシー」をめぐる言説の分析

平野直子

本発表で扱う「代替療法」ホメオパシーは、「レメディ」と呼ばれる独自の理論に基づいて作られた「薬」を処方することで、治療や健康維持をめざす代替療法である。十八世紀末のドイツに生まれ、日本では一九九〇年代後半から二〇〇〇年代にかけて、「癒やし」に関する情報の氾濫の中で紹介されて広がった。

二〇一〇年夏、日本学術会議は会長談話において、ホメオパシーの治療効果を強く否定し、医療現場での使用を戒めた。このことはマスメディアにも大きく取り上げられ、関係諸学会もこれに賛同し、それぞれ医療現場での使用を控えるように呼びかけた。このような強硬な態度で、学術会議や関連団体はそもそも何をそれほど警戒していたのか。談話の中で言われているように、二〇一〇年の時点のホメオパシーは、わが国の多くの人にとっては、なじみのある代替療法ではなかった。報道でそれを初めて知った人々は、学術会議の強硬な姿勢に奇異な思いを抱いたのではないか。

そこで本発表ではまず、ホメオパシーとはどのようなものか、その理論自体の説明を行う。しかし説明をすればするほどに、ホメオパシーを理解するより、ますます信じがたく奇妙なものという感じを抱かせることになるだろう。ホメオパシーは「同種療法」といわれるとおり、患者が困っている症状と同じ症状を起こす物質を、レメディとして投与することで治ると主張する。しかもその際レメディは、薄められていれば薄められているほど、効果が高いというのである。

こうした、科学はおろか、日常の経験的な知にすら逆らうような論理が、なぜ受け入れられつつあったのか。あるいは何を学術会議が危惧し、会長声明まで出す事態になったのか。実は、ホメオパシー自体をいくらよく調べても、この問いへの答えは見いだされない。ホメオパシーは、一九九〇年代から二〇〇〇年代にかけて、すでに日本社会になじみのものとなって普及していた、ある一群の「言説」の存在があって、初めて受け入れられたのである。そしてその言説は、物事の「望ましさ」「価値」に関わる図式を持っていた。つまり「〈自然〉であるこ

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

と」をよしとし、それに「近代（科学）的であること」を対置するような、二項対立図式である。

ホメオパシー以外にも、代替療法や健康法はしばしば、何が「善いこと」で何がそうでないのかという、生活もしくは人生全体に関する言説（単に物理的身体を良好に維持するというだけではなく）の中にある。広く普及したそうした二項対立――しばしばそれは、善悪二元論に近いものになる――を共有する人々のなかで、ホメオパシーは「近代科学的でない」つまり「〈自然〉のものである」という点を「よいもの」と認められて普及しつつあった。ホメオパシーに対する批判には、ホメオパシーそのものが「荒唐無稽」だという指摘と同時に、この広く浸透した二項対立図式によって、人々が（故なく）通常（近代）医療を避けることにつながりかねないことへの危機感が見られるのである。

しかし、代替療法によって起こる問題に対応するためには、学術会議談話で目指されたような、「科学による客観的事実関係の確認」と「啓蒙」だけでは限界があるだろう。代替療法は、「治った」という個々の治療者・利用者の主観的経験が共通の「現実」として組織されるプロセスと、その解釈を枠付ける社会的文脈によってこそ成り立つからだ。これに対し、宗教（社会）学における代替療法研究の蓄積は、そうした主観的経験が「現実」となっていくプロセスを理解するのに重要な視点を提供する。今後もいっそうの展開が必要になるだろう。

宗教者としてのエンゲルハート
――宗教的生命倫理という試み――

池澤　優

本発表は、トリストラム・エンゲルハートの『キリスト教生命倫理の基礎づけ』（*The Foundation of Christian Bioethics*, 2000）を取り上げ、生命倫理言説と宗教の関係を考える。エンゲルハートは、理性的な思考能力を有する人格（パーソン）の自己決定に最大の価値とするパーソン論の確立に寄与したことで知られるが、本書では一転して「伝統的キリスト教」に基づく宗教的生命倫理を提起している。その背景には、理性と人格を価値とする近代の思考法では内容のある倫理性は獲得できないとする歴史認識が存在する。

中世のキリスト教は道徳の単一性を保証していたが、宗教改革による分裂から、理性により万人が共有できる道徳性を獲得することを目指す啓蒙主義が生まれた。啓蒙主義は超越的な実在を把握することを放棄し、価値の重点を内在的な主体（人間）に移して、理性を有する人格の尊重を最大の道徳であるとした（カント）。それはカトリックのスコラ哲学から信仰を除去した、世俗的な宗教であったと言える。しかし、人格の尊重という定言命法が実質的な内容を獲得するためには、先ず基盤となる価値観が存在する必要があるのであって、啓蒙主義も道徳の複数性を乗り越えることはできなかった。そこから、自由な社会の枠組みの中で、特定の道徳を奉じる複数の共同体が並

NII-Electronic Library Service